

連 載

経済金融用語の基礎知識 < 第 3 回 >

金の知識

安藤 範親

金の経済的な機能

金はコーヒー、大豆などと同様、国際商品の 1 品目である。その用途は、指輪などの装飾品からパソコンなどの電子産業用まで多岐にわたっている。また、希少性や保存性に優れていたことで、有史以前から貨幣として使用されてきた。近代には、国際貿易の進展により、金を通貨価値の基準とする金本位制が導入され、現在では、各国通貨当局の準備資産としての役割を担うなど、その有用性は変わっていない。

金取引

通貨としての価値、金属としての使用価値の高さから、金は国際取引されており、その価格は、NY、ロンドン、香港、チューリッヒなど世界主要市場で 24 時間日々変動している。先物相場は、最も活発な NY 商品取引所 (COMEX) が世界的な指標になっており、現物ではロンドン金市場 (LGM) となっている。

これらの価格は、海外では 1 トロイ・オンス当たり (1 トロイ・オンス = 31.1035g 当たり) の米ドル価格で、日本では 1 グラム当たりの円建て価格で取引されており、東京工業品取引所 (TOCOM) に上場されている「東京金」が NY 金価格に連動し、アジア地域の重要な価格指標となっている。

金相場は、市場における需要と供給のバランスによって決まるが、供給としては、世界各国の鉱山産出と公的機関からの地上在庫の放出に大別することができる。アメリカ地質調査所ミネラルイヤーズブックによると、09 年の産出量上位 3 ヶ国は中国 (シェア 13.1%)、米国 (同 9.1%)、豪国 (同 9.1%) となっている。80 年代まで同 70% と圧倒的に市場占有

率が高かった南アフリカは今では同 8.1% と生産低下によりシェアを落としている。

需要としては、指輪などの宝飾品や歯科治療・半導体チップなどの医療・工業用で 80 ~ 90% を占めるが、残りが地金型金貨などの投資用としての需要となっている。また、近年では中国で宝飾品や金の需要が急拡大、07 年には世界のプラチナ宝飾需要全体の半分以上を、金投資では 11 年第 1 四半期に世界最大となった。

上昇し続ける金相場

金価格の推移をみると、紛争や原油価格高騰、インフレなど世界情勢の混乱時に高騰している。昔から「有事の金」とも呼ばれ、情勢悪化に伴う通貨価値低下によるリスク回避手段として金を買われてきた。金にも、利息を生まないこと、土地のように賃貸料を取ることが難しいことなど、欠点はあるが、予想もしない出来事が起こったときの安心・安全資産としての魅力を持っている。

東日本大震災では、先行き不安の強まりから手元資金を確保するために現金化する動きが強まり、有事に強い金も例外とはならなかった。しかし、既にリビア情勢や欧州財政問題で高値圏にあった金は、現金化の動き一巡後、今や押し目買いから上昇に転じている。

